

# 天台智顛における一乗思想の展開

田村 完爾

はじめに 周知のように、天台智顛（五三八―五九七）は四教五時の教判を用いて、中国に流伝した経論等を有機的にまとめ、一代仏教の全容を解明しようと試みた師である。智顛が一代仏教をまとめるに当たり、核とした經典は『妙法蓮華經』

（『法華經』）であると窺われる。『法華經』は、大小乗の統一と一切衆生の成仏、諸法実相の提示、さらには釈迦牟尼仏の久遠常住、娑婆即浄土等を主張する。かかる内容を持つ『法華經』は自ら、全仏教の統一を担う經典として「一乗」と称する。智顛における一乗思想は、第一に『法華經』に根拠するものと推測される。しかし「一乗」の語や概念は、大乘諸經論に散見される。智顛は『法華經』を中心としながら、閲読した漢訳諸經論に基づいて、独自の一乗思想を構築したものと推察される。そこで本稿では、まず一乗思想を徹底して重層的に説く『法華經』の説示を把握し、次に智顛閲読の主要經論における一乗の説示を概観し、次に智顛の師、南岳慧思（五一五―五七七）の一乗思想を瞥見し、その後、智顛の著

述における一乗に関連する説示を検討したい。なお、智顛の著述の検討に際して、三大部等の筆記者、章安灌頂（五六―六三二）が吉蔵（五四九―六二三）の著述から引用したこと

が明白である箇所は、弁別を行うこととする。

一 『妙法蓮華經』の一乗思想 『法華經』は、他の經論にはほとんど見えない「一仏乗」の語を用いて一乗思想を高揚する。「一仏乗」は、一乗と仏乗を合わせた言葉であると窺える（平川彰『初期大乘と法華思想』（春秋社、一九八九年）等参照）。一仏乗は、二乗と相對關係にある一乗（菩薩乘）ではなく、三乗を統一する仏乗（一切衆生悉皆成仏の乘）を意味すると見られる。

『法華經』二十八品を通覧すると、「一乗」「一仏乗」の語は方便品を中心に、主に經の前半に頻出しているが、その一乗思想は一經全体にわたっていると看取される。方便品を中心に、二乗、三乗、諸乗の一仏乗への統一、一仏乗から三乗への開出、方便の三乗による衆生教化が語られ、声聞弟子へ

の具体的な授記を通じて二乗作仏の実現が示される。方便品偈頌に示される小善成仏は、全ての行の開会・肯定とも受け取れ、一乗思想の具現化であると考えられる。空と一乗、仏種と一乗の連関も、方便品に示される。また、三乗即一乗を示す種々の譬喩も『法華経』の前半を中心に示される。

しかしながら、『法華経』の中盤から後半にかけても、『法華経』の一句一偈の聞法随喜による授記、悪人成仏・悪人授記、女人成仏・女人授記、仏寿久遠の聞法による未来成仏、謗法者の成仏等により一切皆成が徹底して示されていることは、一乗思想の展開が一經にわたっていると見ることができ。俗書・治世・生業等を『法華経』に順ずるとする、いわゆる「俗諦開会」の発想も、不軽菩薩の但行礼拝も、宝塔品・神力品における通一仏土も、一乗思想の展開・示唆等と見ることができ。

『法華経』の未来弘通に伴う誤解・迷惑・不信も一乗に起因することは方便品に示され、法師品・安樂行品等でも、怨嫉を受けることに注意がはらわれ(大正九・三一中、三九上)、特に勸持品・不軽品等において、受ける迫害の具体的内容が明確に語られる。

このように、『法華経』の一經にわたる主題として、一乗思想があることを確認できる。

## 二 智顓閲読の主要な漢訳経論における一乗の説示概観 本

節では便宜上、經典の成立順・訳出順ではなく、智顓の五時判に沿った形で、閲読経論の説示を列挙することとする。智顓は「究竟の大乗は華嚴・大集・小品・法華・涅槃に過ぎること無し」(『法華玄義』大正三三・七三二下、『維摩経玄疏』大正三八・五四〇下)と明言しており、これらの大乗諸經典(『小品般若経』の注釈である『大智度論』を含む)の説示が智顓教学の根幹を形成している。また、智顓の考える主要な論としては、『四教義』(大正四六・七六八中)に、阿毘曇論書(『俱舍論』、『婆沙論』、『成実論』、『毘勒論』(現存せず)、『十地経論』、『撰大乘論』、『唯識論』、『中論』、『十二門論』、『大智度論』、『金剛般若論』、『法華論』、『涅槃論』等が示されている。これらの論典の説示が智顓教学の諸要素を形成していると推測される。おおよそ以上の経論を中心に、一乗に関する説示を検討することとする。

A 華嚴部経論 『華嚴経』(六十華嚴)では、一乗を如来の別名(大正九・四一九下)、道諦の別名(四二〇中)とする。また、一切の諸仏は唯だ一乗をもつてのみ生死を出離すると示す(四二九中)。さらに、一仏乗に入ることにより三世に達すると示す(四三二上)。一乗は究竟して一切の無差別、諸乗の無差別を撰すると説く(五六九上)。また、菩提心を大乘とする説示も見える(七七五下)。しかし、一乗と二乗、一乗と一切乗、あるいは三乗の個々を並存的に示す箇所が多く見え

(四三四下、四三五中、五七〇下、五七七中、五九五中、六五〇中、六八九上、七三八下、七八一上、七八七中等)、時には菩薩の発心の理由を三乗の道の分別に求めたりもする(四四七上)。また、一切乗を学びつつ大乘を捨てないという表現も見える(七七〇下)。一乗の異名として、一切智乗、具足大乘、不可壊乗、速疾乗、功德成就乗、出世間乗、出生無量諸菩薩乗、無礙乗、宝乗、十力乗、摩訶衍乗、無所有乗、離苦寂靜乗、清淨行乗、一切施乗、般若波羅蜜乗、法王乗、妙乗、等を掲出する(五〇〇下以下。六八九上も参照)。六十華嚴は一乗の超勝性を高揚するが、一乗による二乗や一切乗等の統一という指向は少なく、むしろ一乗・大乘と並存して一切乗・二乗・小乗があるという発想が強いように感じられる。

『梵網經』では一切の行を一乗に収束させ、空を会得する一つの智慧に乗ると示す。一乗に智慧と行の面を示し、一乗により自在に自行化他をおこない、一切衆生を三界の結縛・生滅から度すと説く(大正二四・二〇〇〇上)。「菩薩瓔珞本業經」では、十住・十行・十廻向において一乗の信に入り、一乗の因となる教えを得るとする(大正二四・一四中)。

『十地經論』には、一乗に関する特徴的な説示は見えない。『十住毘婆沙論』では、声聞乗・辟支仏乗・大乘は仏説である故に差別はなく、同じく無余涅槃に至るとする(大正二六・二〇中。四六上―中も参照)。かかる説示と並行して大乘

の優位性の提示と小乗批判も散見される(三六下、三八下等)。修行者が一旦地獄に墮しても最終的に仏になるが、二乗に墮したならば最終的に仏道は遮られる、という説示も見える(四一上、九三上)。本論は、大乘の優位性を説きながら二乗も並行して認めるという立場を取る。本論には「一乗」の語は見えず、三乗を統一する乗の発想も見えない。

**B 鹿苑部經論** 阿含經典の中では『雜阿含經』に「一乘道淨於衆生」という定型句が見えるが(大正二・一三九上、一四三下、他)、これは仏教の教えを素朴に「一乘道」(一つの乗物が通る道)と表現している如くである。旧訳の阿毘達磨論疏の中では、『雜阿毘曇心論』に「一乘道」(大正二八・八上)の語が見えるが、一乗思想はないように窺われる。総じて、智顛閲読の小乗の經論には、一乗思想は見えないようである。

**C 方等部經論** 『維摩經』には表面上、一乗の概念・発想は見えない。声聞の不成仏を徹底的に説く本經に一乗思想が見えないことは、むしろ自然といえる。ただし同經は、維摩居士の部屋の香の功德を称え、まるで瞻蔔林に入ったならば誰もが瞻蔔の強い臭いのみを嗅いで他の臭いが消え失せるように、大乘の下では二乗の功德は消え失せると示す(大正一四・五四八上―中)。智顛はこの文を積極的に捉え、「二乗も大乘」一乗にまとめられ包摂される」と受け取り、『維摩經』にも一乗思想(円教)「不可思議解脱」(五四六下、他)が

示されているとする(第四節参照)。

『勝鬘經』は具名を『勝鬘師子吼一乘大方廣經』と称するよう、明確な一乗思想が見える。一乗章では、声聞乘・緣覺乘は皆な大乘に入るが、大乘とは即ち仏乘であり、この故に三乗は即ち一乗であるという。一乗を得るとは阿耨多羅三藐三菩提、涅槃界、如来法身を得ることであり、究竟(無辺・不断)の法身は究極の一乗であるとする(大正二二・二二〇下)。また、大乘には三乗がなく、三乗は一乗に入り、一乗が第一義乗であると説かれる(二二二上)。『勝鬘經』では、如来藏法身・撰受正法を同一線上で考える(二二三中等参照)。この点において、慧思・智顛の発想に大きな示唆を与えたものと推測される。さらに進んで解釈すれば、勝鬘夫人は授記される(二一七中)ので、女人成仏も一乗思想に含まれると見ることもできるかもしれない。

『大集經』にも三乗を一乗にまとめる説示(大正二三・五上、九下、七二中、二一四上、二一八上)、一切衆生が悉く同じく一乗であるという説示(六二下)、大小乗・善惡・男女等の差別はなく衆生の機根は一乗のみであるとする説示(二八六中)、等が見える。三乗は各々、断証を同じくするという説示(天台教学における三乗共の十地)も見える(二六〇下)。しかしながら『法華經』のように、三乗が統一される必然性は強調されず、三乗が並存して各々が発心・修行し不退に至るとする

(二七〇中等)。

『宝積經』にも、声聞・緣覺は大乘(仏乘)に入るとし、「三乗即一乗」が明確に示される(大正一一・六七六中)。一乗と法身、如来、菩提、涅槃が同一であることも示される(同前)。『楞伽阿跋多羅寶經』には、三乗を統一する一乗が示される(大正一六・四九七中、四九八頁中)。全ての教えは一乗であり、それが大乘であるとも説かれる(五〇八中)。『首楞嚴三昧經』は三乗の並存を示し(大正一五・六二九下)、菩薩が首楞嚴三昧に通達すれば三乗にも皆な悉く通達すると説く(六四三下)。本經には、一乗思想は見えない。『金光明經』にも、一乗の説示・思想は見えない。

『思益梵天所問經』では、種々の乗を統一する一乗としての大乘を説く(大正一五・三四中)。諸法実相と大乘を結びつけ、大乘を不可思議乗として相對を超越した乗、他の乗を出生する無限・無尽な乗、一切衆生を受容して尽きない無上乘とし、その本質は虚空であり形・色がなく自由自在とする(五四上)。その一方で三乗の並存を認め、菩薩は二乗を善く知り、仏乘に通達して三乗を彼此へだてなく度すとする(三七下、五八上、五八中)。

『撰大乘論釈』(真諦訳)は、『法華經』等の説示を踏まえながら、独自の一乗思想を主張している(大正三一・二六六上)。同釈では、如来の成立する正法に三種ありとし、小乗、大乘、

一乗を示し、三者の中では一乗が最も勝れると説く(二二二中)。また、三乗の人に三つの行の差別があると思う者は、一乗の理に迷うとする(二二二中)。同釈では、未定性の声聞・菩薩に対しては一乗を説いて定性の菩薩とし、大乘を修せしめると説き、「定性の声聞には一乗を説くことはできない」と一旦は説く(二六五上―下)。また、定性の菩薩に対して一乗を説くとする(二六五下)。さらに、法と無我と解脱は等しい故に、その一方で三乗の根性は不同であるとし、この二面を得て涅槃し、究竟して一乗を説くとする(二六五下)。要するに、法(真如)・無我・解脱が等しいと同時に、三乗の根性が不同であることが一乗の内容であるという。次に、一乗は法如平等の意を説くとし、未定性の声聞を教化するとともに、さらに進んで「定性の声聞の根性を練って菩薩とさせる」ために一乗を説くとする(二六五下―二六六上)。次いで、一乗を超える乗は仏乗であるが、仏の究極の涅槃に至れば乗は没すると示す(二六六上)。以上、『撰大乘論釈』では、定性の菩薩、未定性の菩薩・二乗、さらには定性の二乗をも教化するために一乗が説かれるとする。一乗は、法(真如)・無我・解脱の平等を説示するという。そして究極的には仏説は一乗のみであるとする。ただし、三乗の根性が不同であることを説くのが一乗であるとし、三乗の根性の差別を統一する指向は薄いように見受けられる。

天台智顛における一乗思想の展開(田村)

『宝性論』は具名を『究竟一乗宝性論』と称するが、一乗についての直接的説示はほとんど見えない。論名の「宝性」とは仏性を指すので、一切衆生が仏性を具えて如来蔵の状態にあり、等しく成仏することを示すために、漢訳者が「一乗」の名を付したものと思われる(宇井伯寿『宝性論研究』(岩波書店、一九五九年、二六頁)・J. Takasaki, *A Study on the Ratnagotravibhāga (Uttaratantra), Being a treatise on the Tathāgatarāgha Theory of Mahāyāna Buddhism*, Roma, 1966, p.38, footnote 64. 平川彰「法華經における「一乗」の意味」(『金倉圓照編『法華經の成立と展開』平楽寺書店、一九七〇年)。平川彰『初期大乘と法華思想』春秋社、一九八九年、四一五頁参照)。『宝性論』における一乗の直接的説示は一箇所で、一切衆生には仏性があるので三乗の中にも一乗の信心がある意を逆説的に示している(大正三一・八三一上―中)。『仏性論』では、三乗の中において一乗の信樂を起す意を逆説的に説いている(大正三一・八〇〇上。『宝性論』の説示と軌を一にする)。

D 般若部経論 『金剛般若経』 『金剛般若論』には、三乗を統一する一乗の思想は見えない。『仁王般若経』には、一乗は無相(大正八・八二七中)、三乗は薩般若の範疇として示される(八二九中等)が、両者の関係は明示されない。

『大品般若経』では、般若波羅蜜より三乗の教を説くとする(大正八・二七九下)。そして、三乗の教えは各々、縁ある衆

生を度脱し涅槃に至らせるとし、三乗の並存を認める(三八五中等多数)。また、仏菩薩は三乗を用いて衆生を教化する、とも述べる(三七五中等多数)。しかし、菩薩が六波羅蜜を行じ始める時には、衆生が三乗に分かれていると見えても、「私が作仏する時は、我が国土の中の衆生には二乗の名はなく、純ら一大乗のみがあるように」と誓願すべきであると諭す(三四九上)。本経には、所々に二乗を批判する箇所と、積極的に三乗の並存を肯定し許容しようとする箇所が交錯している。本経は、三乗は空において本質を同じくすると示し(二六八中等)、三乗は無差別であり一乗もないとして、空思想により乗の差別、乗への執著を取り払う説示も見える(三三七下)。「小品般若経」(大正八・五六三下)、「放光般若経」(大正八・八五下)も同意)。他の般若経典同様、本経にも、三乗を統一する一乗という発想は見えない。

『大智度論』は『大品般若経』を注釈しつつ、本経とは異なる独自の思想も展開する。本経に従って三乗の並存と大乘の優位性を説くが、三乗を統一する一乗の説示は見えない。本経同様、一切衆生の般涅槃は三乗を通じて行われるとする。すなわち、三乗の記別を授けるために、仏は般若経を説くとする(大正二五・五九中)。三乗共の十地を示す故か、三乗それぞれの価値を認める(一九五下、二八一中等)。それと同時に、小乗の批判も行う(二三五中等)。一切衆生は必ず三乗に至る

とし(四一七中)、三乗はともに般若波羅蜜・諸法実相を修学し、空解脱門に入り、無余涅槃を得るとする。大小乗の關係については、大乘は小乗を兼ね(七五六中)、含め受けるとし(四一六上)、大海が衆流を受け入れるように、小乗・諸乗は大乘に入ると説く(八六上)。また、大乘において常住の法(法性・如・真際・虚空・涅槃、等)は空であると述べ(一七一中)、進んで、空||大乘||般若波羅蜜||五波羅蜜||如||法性||實際||不可思議性||涅槃||空(不合・不散・無色・無形・無対・一相・無相)と示す(四三〇上―中)。かかる融通的説示は、智顓に継承されていく。本論では、一乗の語は用いるが、三乗を統一する教えではなく、諸仏が純ら菩薩に対して説く教えとする(三〇八中、三二一下、三四二上―中)。仏が菩薩のみの眷属を有する例として『不可思議解脱経』(華嚴系の經典。不伝。『華嚴経』大正九・六六七上参照)、『法華経』(大正九・三九下)の説示を掲げる。なお、『中論』『百論』には一乗の説示は見えない。『十二門論』では、二乗より大乘が優れていることを強調するが(大正三〇・一五九下)、一乗の説示は見えない。

E 法華涅槃部経論 『法華論』では、声聞・縁覚は究竟の唯一仏乗を知らないと言説(大正二六・七中)。仏はまず三乗を説き、その後、三乗を一乗と為すという(九上)。また、『法華経』方便品に示される五法(あらゆる現象にそなわる五つの特性)の第五「何体法(あらゆる現象の本体は何か)」について「無

二の体」であるとし、無量の乗が唯一の仏乗であつて二乗がない故に「無二の体」であると説明する(六中)。さらに、唯一の乗の体、諸仏如来の平等なる法身の体とする(七中―下)。また唯一の大乘があり二乗がないことは「乗平等」を意味し、声聞に菩提の記を授けることは「乗平等」を示すとする(八下)。さらに、『法華経』は「乗平等」「世間涅槃平等」「身平等」を示すとし、この三種平等によつて一乗の法を説くとする(九上)。「世間涅槃平等」とは、多宝如来の涅槃と世間一般の涅槃は平等無差別である意、「身平等」とは、多宝如来の示現する身、自身、他身、法身は平等無差別である意とする(八下)。そして、彼此、仏性、法身は悉く平等である」と述べる(同前)。つまり『法華論』における一乗とは、三乗の本質が一乗で無差別(全て唯一の大乘)であると同時に、教・行・涅槃・仏・衆生・法身・仏性等が平等無差別であることを意味するものと窺われる。

『法華経』の結経とされる『観普賢菩薩行法経』は、『法華経』の一乗思想を前提として展開する(大正九・三九〇中)故か、一乗思想の高揚はあまり見えない。ただし、修行者は大乘の因を観察すべきであり、大乘の因とは諸法実相であると述べる(三九二中)。この文により智顛は、修行の「初めより実相を縁する」(大正四六・一下)止観行を建立する。なお『法華経』の開経とされる『無量義経』には、特徴的な一乗思想は見え

ない。

大乘『涅槃経』(南本)では、大乘(＝仏乗)を学ぶ者の肉眼を仏眼に開会する説示(大正二二・六三八上)、三乗即一乗・一乗即仏性(六四四上、七六九上、七七〇中―下)、一切衆生悉有一乗(七六九上、七七〇中―下)、等の説示に特徴が見える。その一乗思想は『法華経』の影響を受け(七〇五中、六二三上、七〇七下、七一上、七五九中、七六一上)、仏性思想の中で融合されている。『涅槃経』は、重要法門の概念の拡大化、異法門の概念の融合化、重要法門に対する斬新な視点からの把握や多面的把握、等を主張する面が強く見えるが、智顛は絶待妙の立場から、かかる『涅槃経』の着想を、積極的に摂取しているように窺える。一乗＝仏性(如来蔵)という思想も、『涅槃経』に依拠する。

『涅槃論』では、如来は方便により三乗を説くが(大正二六・二八〇中)、三乗は如来の本意ではなく、如来の本意は涅槃であり、涅槃の実相理においては大小乗はなく一相であり無差別であると示す(二八〇中)。ただし衆生の智が物事に差別をつけて考えるので、如来も教において差別を設けて大乘の違いを説いて導く、と述べる(同前)。

以上、智顛閲読の主要な諸経論に見える一乗に関する説示を大まかに見てきたが、『法華経』のように具体的に声聞の授記作仏をもつて一乗思想を示す例はほとんどない。ただし、

三乗を統一する一乗の思想は大乗経論に散見される。また、一切衆生に内在する一乗、一乗を法身・涅槃・仏性・如来等と同質とする開会思想等も、『法華経』以外の大乗諸経論に散見される。智顓はこれらの思想を摂取し、一乗思想を展開していると思われる。

三 南岳慧思の一乗思想 慧思の一乗思想は『法華経安楽行儀』、『諸法無諍三昧法門』、『随自意三昧』に見える。慧思において一乗とは一切衆生が如来蔵であり、仏性を具し、涅槃に至る中間の仏である様をいう(大正四六・六九八中)。端的に、一切衆生は一乗であるとも述べる(『涅槃経』の影響)。そして一乗を説く『法華経』は大摩訶衍であり、『法華経』の教え・行(一乗)と如せば、自然に仏道を成ずるといふ。また、一乗は一即多の教・行としても示される(『華嚴経』の影響)。また、一乗は一生補処の菩薩のみに授記する仏の智慧の教えと示される箇所もある(六三五上)。「大智度論」の影響)。凡夫・聖人の始終(修行の初後)は本末究竟・平等無二であり、究竟して一乗であるとも述べる。慧思は、佛凡一如・一切具足・中道・色心普遍なる様を大乘(一乗)と見ていると窺える(新纂統藏五五・五〇四下、五〇五上)。かかる慧思の一乗思想は、そのほとんどが、智顓の一乗思想へと連なる要素となっていることを、確認することができる。

#### 四 智顓における一乗思想の展開 智顓は常に一切経の統一

を意識して自説を展開するので、智顓の思想全体が一乗思想に通ずる面がある。また、一乗とは究極の大乗の意も有するから、「絶待妙の大乗(小乗と相対的に考える大乗ではなく、小乗をもその下にまとめ融合する絶対的大乗)」とも表現し得る。要するに、智顓教学全般を概観し、かつ、智顓の大乗に対する考え方全般をも踏まえ、一乗思想を見る必要がある。このような視点をもって智顓の著述を通覧し、検討を加えた。

智顓は、『法華経』に示される三乗即一乗・一切皆成、等の一乗思想を第一の依拠としながらも、諸経論に説示される開会的・融通的な一乗思想(一切衆生に内在する一乗、一乗を法身・涅槃・仏性・如来等と同質とする思想等)を摂取する。かかる傾向は、師である慧思の一乗思想を継承・発展させたものと推察される。

智顓の一乗思想は、『法華玄義』『法華文句』『摩訶止観』『三観義』によく示されている。灌頂が吉蔵疏から明らかに引用した箇所を除き、その主要な一乗思想を列示すると、以下の通りである。

『法華玄義』では、①小さな善行・小乗の諸行を「仏に至る道」とし、授記をもって開会する広大な統一された乗物(教行)を一乗とする(大正三三・六八一中)。②一乗を、全てを包摂し帰一させる教え、衆生が同じく乗る仏乗として捉える(六八四中―下)。③一乗を、四悉檀の同異を円融する教え、



無分別の法（分別を超越した教え）とする（六九〇下）。④ 釈尊が『法華経』において示す神通力は皆な一乗のため、一切衆生を等しく成仏せしめるために發揮されるとする（六九七下）。⑤ 開会の教えを一乗（『法華経』）とし、開会によって待対（比較）を絶し、全ての善悪の行為・要素を仏種として開会し、仏に至る一歩一歩であると肯定することにより、一切衆生の成仏を開くとする（七〇〇中）。⑥ 一乗は衆生に対し等しく仏知見を開示悟入させ成仏させる教えであり、諸仏・釈尊の出現した一大目的は一乗を説くことにある、と考える（七三五上—中）。⑦ 一乗には教・行・位（証）の三側面があるとする（七三八上—中、七四〇下）。⑧ 一仏乘（一乗）には理（真性軌）・智（観照軌）・行（資成軌）の三面があり、この一乗は一切衆生に具わっており、理・智・行は一乗において円融一体であると捉える。この一仏乘に具わる三面は、第一義諦（一乗）・如来蔵・第一義空にも配される（七四一中—下）。⑨ 一乗（一仏乘）は三乗のみならず五乗、七方便、そして九法界（一切衆生）にまで展開すると説く（七四二上）。⑩ 円教では真性軌（法身を一乗の体とする。円教の一仏乘（大白牛車）は法身（理）を体とし、禅定（行）・智慧（智）を様々な補助具とすると示す。さらに、法身（理）を乗の体とするので本来不動であるが、智・行の用（はたらき）によって動くとし、「不動にして動」なる乗が、円教の一仏乘であると説く（七四二中—七四三上）。

天台智顛における一乗思想の展開（田村）

⑪ 一仏乘は三大乗に通ずるが、理乘（理）を本体とし、随乘（智）・得乘（行）を力用（はたらき）とする（七四五上—中）。⑫ 『涅槃経』の仏性（一乗は『法華経』の実相（一乗である）と示す（七四五下—七四六上）。⑬ 大乘經典による小乗批判も一乗（乗の統一）への一段階であり、『法華経』にて小乗の行を菩薩行として開会することは一乗の特性・はたらきであると示す（七五四下—七五五上）。⑭ 一実の教えを説く『法華経』を聞法することにより大乘の解を發し、自らが眞の仏子であると目覚めた眷属を「一乗の眷属」とする（七五五中）。⑮ 『法華経』の体玄義（本体、悟り）を論ずる中、一乗（一大乗）の異名として、諸法実相・仏知見・一切智地・最実事・宝処・繫珠・秘密藏・平等大慧・非如非異・秘要之藏・普賢色身三昧・普門・殖衆徳本、等を定める。これらの法門に対する一乗の特性は、「運載」すなわち衆生・修行者を載せて運ぶ点にあるとする（七九二下—七九三上）。⑯ 『法華経』の体玄義（理）を「実相一乗」とも表現する。一般に、智顛の説く『法華経』の体は「諸法実相」とされるが、一乗も『法華経』の体として「諸法実相」に次いで重視されている（七九三上—中）。⑰ 一乗を宗玄義（修行者が仏に至るために積む、因果を重ねる自行）の範疇で考える場合もある。その場合、「全てを統一する行」「全ての衆生を成仏に至らしめる行」の意が強い（六八一中、六九一下）。⑱ 『法華経』の用玄義（はたらき、化他行、衆生教化）

を積する中、十重頭一(『法華經』において一乗を顕すことを、十種の視点から示した法門)を示す。すなわち i 破三頭一、ii 廢三頭一、iii 開三頭一、iv 会三頭一、v 住一頭一、vi 住三頭一、vii 住非三非一頭一、viii 覆三頭一、ix 住三用一、x 住一用三である。ここで智顛は、『法華經』が一乗を開顕し衆生教化を行う意義を、情・智・理・教・行・仏意・権智・理事・権巧・眷属・誓願、等の面から多角的・有機的にまとめようと試みている(七九七中―七九八中)。(19) 釈尊(その本体である法身仏)の本意の教法は一乗であり、法身仏は法身の菩薩(初住以上の、諸法実相を部分的に体得し、段階的に悟りの世界に入った菩薩)に対しては一乗だけを説くと示す(七九八下)。(20) 釈尊の一代仏教・四教五時は全て一乗より開出されていると示す(八一〇下―八一上)。要するに『法華玄義』においては、一乗は釈尊一代にわたる大乘經典を通過する教え、釈尊が衆生教化の始終において活用する教え、四教五時の全てを開出する教えと捉えられ、さらには理・教・行・証にわたる、中心的・総合的法門と受け止められている。一乗は一切法の開会を特性とし、一切衆生に具わり、一切皆成を実現させるとする。したがって、小善も小乗の諸行も仏道として開会されるが、究極的にいえば、全存在・一切法は一乗として開会されるとする。

『法華文句』では、①乗とは、聞法・生解・観智・破煩惱・

出三界の一連の過程の全てを指すと示す(大正三四・二六上)。  
②一乗を、中道・無性を説く統一された教とし、さらに進んで、理・智・行を具えた三因仏性とする(五八上)。  
③一乗を秘密の教え『法華經』(純円の經)とし、全ての途(教え・修行等)を包摂すると示す(六三上)。  
④一仏乗を円教の絶対的な仏乗とし、三乗・九乗・四乗が円融不二で一体となった平等大慧の乗とする(七一上)。  
⑤一心三觀を円教の大乗を運ぶ觀法とする(八一中)。  
⑥『法華經』を、開三頭一を説く一乗の經とし、この一乗に乗る種々の方法、一乗の成就(証果)等を多面的に説く經であると示す(一四三上―中)。

『摩訶止觀』では、①三種止觀を同じく大乘(一仏乗)とし、大乘と実相と止觀を円融一体と見る(大正四六・一下)。  
②十乘觀法を一仏乗とし、一仏乗を心そのものとし、心の本性である法性・実相とし、即空即仮即中の円融三諦であるとする(二〇〇上)。  
③一仏乗は十法界を収め、無量の道品を収め尽くすとする(同前)。  
④そして、六即すなわち修行段階の全て(理・教・行・証)が一乗の道のみであると示す(二〇〇中)。  
『三觀義』では、『摩訶止觀』の一乗思想がさらに深められる。①智顛は一心三智(一心三觀)をもって、三乗をまとめる大乘すなわち一仏乗と捉え、円教とする(新纂統藏五五・六七五中、六七六下―六七七上)。  
②一乗とは一切衆生に具わる三因仏性であり、三種乗(理乗・隨乗・得乗)に展開さ

れ、三徳を成就するという(同前)。<sup>③</sup>、『維摩経』の不思議解脱を仏性・一乗の理とする(六七七上)。<sup>④</sup>十乘観法を大乘(一乗)とし、それは一心三観に具わり、この大乘によって三界から脱出して薩般若住(初住以上)に至るとする(六七七上—中)。<sup>⑤</sup>そして不思議境(不思議十二因縁。己心に不生不滅の十法界・十二因縁を具する状態)は、一仏乘に説かれると説く(同前)。<sup>⑥</sup>また、大乘(一乗)は六即であり、衆生に本来具わり、三界の内外にわたり、理即凡夫より究竟即へと運び至らしめると説く(六八二上)。<sup>⑦</sup>究極には衆生そのものが大乘であり、大乘とは虚空、仏性、大涅槃、不生、不可説であると示す(同前)。

**小結** 以上見てきたように、智顛の一乗思想は、第一に『法華経』に依拠しながら、さらに徹底した開会思想であると窺われる。小乗・二乗や種々の小善を一仏乘の下に開会するだけでなく、進んで一切(理、智慧、教、行、証、衆生、仏、仏性、全存在)を一乗そのものとして開会する傾向を強く持っている。一乗は個々人に等しく具わっていると同時に、永遠・普遍であると捉えられている。かかる徹底的な開会は『涅槃経』『大集経』『勝鬘経』『大智度論』等の大乘諸経論の一乗思想の影響を受けているものと確認できる。

智顛の教学は、一切経の会通・体得を目指す中で、複数の重要法門の積極的な融通、重要法門の永遠・普遍性の強調が

進められていく、という特徴を持つと思われる。その端的な一面として、一乗思想を挙げることもできると思われる。なお本稿を作成するに当たり、SAT大蔵経データベース、CBETA2008、天台電子仏典CD2等の検索システムを活用させていただき、経論積本文の全体的把握と該当箇所の一の検討を行った。また、本稿は紙数の都合上、概説的な内容となっているので、機会を改めて詳論を發表したいと考えている。

〈キーワード〉

一乗、一仏乘、三乘即一乗、一切皆成、開会、三因仏性、諸法実相、開三顯一、四教五時、円教、一心三観

(立正大学准教授・博士(文学))